



執筆者: マーケット・プレイス・オフィス代表 立澤 芳男(たつざわ よしお)
流通系企業の出店リサーチ・店舗コンセプトの企画立案など、都市、消費、
世代に関するマーケティングの情報収集と分析
元「アクロス」創刊編集長。著書に「百万人の時代」(高木書房)等

2008年8月

第三回 今(いま)どきの独身未婚者

未婚化から 晩婚化へ そして非婚化へ進むニッポン

未婚化とは、未婚者(一度も結婚していない人)の割合が増えること。現在日本は少子化が進行中だが、少子化の過程では晩婚化にともなって20歳代から30歳代にかけての未婚化が著しく進む。女性20代後半では、1970~2000年の間に未婚率は18%から54%へと3倍に増え、半分以上が未婚者となった。男性30代前半では同じ時期に12%から43%へと3.6倍。これらの年齢層では、その分だけ結婚している人が減って、出産も減っている。また、一方で生涯未婚率(50歳時点で一度も結婚をしたことのない人の割合)は、まだそれほど顕著には増えていないが、2000年には男性で1割を超えるなど、今後急速に増加することが見込まれる。晩婚化(結婚の遅れ)に加えて、非婚化(生涯結婚しない人の増加)は、日本の社会を大きく変えてしまう。未婚者の増加と未婚率の増加が、日本社会が晩婚化に向かうのか、非婚化に向かうのか、現在の約1千万人を超える若い未婚者たちの実態を探る。

1. 日本の独身者数推移

おひとりさま(独身者25~39歳)一千万人時代の到来

2. 日本の年齢別未婚率の推移

止まらない未婚率の上昇。男30~34歳は47%、女は32%に

3. 独身者の結婚観

わかっちゃいるけど止められない「独身」ライフ

4. 親と同居する未婚者の実態

長男長女時代。進まぬ親離れと子離れ!

5. 独身者のトレンド

知っておきたい「独身」に関するトレンド用語 「婚活」「負け犬」ほか

6. 未婚者最近の話題 六選

結婚イメージ—未婚者は「幸」、既婚者は「忍」ほか

7. 独身者への警鐘

20代男性の3人に1人は生涯未婚の恐れほか

執筆者コメント

『国家を信用せず、家族を作ろうとしない時代がやってくる』

1. 日本の独身者数推移

おひとりさま(独身者 25～39 歳)一千万人時代の到来

- ①2005年の国勢調査によると15歳以上人口の日本の未婚者数は、男女合わせ2983万人で、未婚率は男性が31.4%、女性が23.2%となっている。
- ②未婚率の高い25～29歳の未婚数は男女計540万人で15年前の90年に比べると1.3倍であるが、30～34歳の未婚者が急激に増え、15年前対比2.2倍の386万人となっている。
- ③年代別で未婚者数をみると、30歳代、40歳代が急増しており30歳代では15年前と比べると2倍の598万人、40歳代は1.6倍の236万人になり、晩婚化が進んでいることが確認できる。
- ④また、中高年・高齢者である50歳代、60歳代での未婚者が非常に増えているが、もともと人数も多く若いときになかなか結婚せずに中高年になってしまった団塊世代がここでもその存在感を見せている。

■30代未婚(アラスリー)今は、598万人。40代未婚(アラフォー)は236万人

▼年齢別の未婚者数推移(単位;人)

各年「国勢調査」

	昭和 15	昭和 35	昭和 45	昭和 55	平成 2	平成 12	平成 17 年	
	1940	1960	1970	1980	1990	2000	2005	1990=100
計・歳	13,714,898	20,222,327	22,667,350	22,000,511	27,420,708	29,880,658	29,832,537	108.8
15～19	7,094,559	9,304,683	9,034,383	8,213,817	9,841,343	7,436,941	6,528,529	66.3
20～24	4,280,749	6,698,308	8,667,841	6,636,906	7,800,958	7,618,746	6,697,904	85.9
25～29	1,522,681	2,803,049	2,947,761	3,581,181	4,228,861	6,046,586	5,407,375	127.9
30～34	376,567	730,963	799,537	1,651,356	1,815,081	3,055,396	3,863,478	212.9
35～39	158,949	281,318	434,668	645,578	1,195,388	1,607,436	2,117,474	177.1
30歳代	535,516	1,012,281	1,234,205	2,296,934	3,010,469	4,662,832	5,980,952	198.7
40～44	89,604	133,385	300,314	382,873	932,798	1,054,185	1,379,907	147.9
45～49	56,517	85,783	179,776	305,269	509,198	931,870	979,567	192.4
40歳代	146,121	219,168	480,090	688,142	1,441,996	1,986,055	2,359,474	163.6
50～54	41,269	59,163	104,187	236,573	339,303	805,201	885,950	261.1
55～59	33,292	42,340	71,027	148,234	275,923	447,382	768,845	278.6
60～64	29,176	30,338	49,926	82,932	213,401	296,337	427,010	200.1
65～69	16,440	20,674	33,200	53,392	129,518	231,714	279,182	215.6
70～74	8,989	15,358	22,002	32,088	68,250	172,189	211,642	310.1
75～79	3,947	10,150	12,820	17,835	40,184	100,207	152,704	380.0
80～84	1,545	4,982	6,805	8,576	20,166	45,952	83,135	412.3
85以上	614	1,833	3,103	3,901	10,336	30,516	49,835	482.1
(再掲)								
65以上	31,535	52,997	77,930	115,792	268,454	580,578	776,498	289.2

■ 30歳代の未婚者が全未婚者の20%に。昭和45年は5.4%だった。

▼年齢別人口でみる未婚者数構成比推移（単位：％）

各年国勢調査

	大正9	昭和15	昭和35	昭和45	昭和55	平成2	平成12	平成17
	1920	1940	1960	1970	1980	1990	2000	2005
15～19	57.0	51.7	46.0	39.9	37.3	35.9	24.9	21.9
20～24	27.7	31.2	33.1	38.2	30.2	28.4	25.5	22.5
25～29	8.1	11.1	13.9	13.0	16.3	15.4	20.2	18.1
30～34	2.6	2.7	3.6	3.5	7.5	6.6	10.2	13.0
35～39	1.4	1.2	1.4	1.9	2.9	4.4	5.4	7.1
30歳代	4.0	3.9	5.0	5.4	10.4	11.0	15.6	20.0
40～44	0.9	0.7	0.7	1.3	1.7	3.4	3.5	4.6
45～49	0.7	0.4	0.4	0.8	1.4	1.9	3.1	3.3
40歳代	1.6	1.1	1.1	2.1	3.1	5.3	6.6	7.9
50～54	0.5	0.3	0.3	0.5	1.1	1.2	2.7	3.0
55～59	0.4	0.2	0.2	0.3	0.7	1.0	1.5	2.6
60～64	0.3	0.2	0.2	0.2	0.4	0.8	1.0	1.4
65～69	0.2	0.1	0.1	0.1	0.2	0.5	0.8	0.9
70～74	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2	0.6	0.7
75～79	0.1	0.0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.3	0.5
80～84	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2	0.3
85以上	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2
(再掲)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
65以上	0.5	0.2	0.3	0.3	0.5	1.0	1.9	2.6

2. 日本の年齢別未婚率の推移

止まらない未婚率の上昇。男30～34歳は47%、女は32%に

- ①2005年の国勢調査で15歳以上人口の配偶関係をみると、有配偶率は男性が60.8%、女性が57.0%、未婚率は男性が31.4%、女性が23.2%となっている。
- ②25～29歳の未婚率は、男性が71.4%、女性が59.0%と、平成12年に比べそれぞれ2.1ポイント、5.0ポイント上昇している。また、30～34歳の未婚率は、男性が47.1%、女性が32.0%と、平成12年に比べそれぞれ4.2ポイント、5.4ポイント上昇している。
- ③さらに、35～39歳の未婚率をみると男性が30.0%、女性が18.4%と、平成12年に比べそれぞれ4.3ポイント、4.6ポイント上昇している。

■未婚率上昇は5年毎、各年齢でアップし、未婚化と晩婚化は進む

▼男女別年齢別未婚率推移(単位:%)

各年「国勢調査」

	昭和 35	昭和 45	昭和 55	昭和 60	平成 2	平成 7	平成 12	平成 17
	1960	1970	1980	1985	1990	1995	2000	2005
男	34.8	32.4	28.5	29.6	31.2	32.1	31.8	31.4
15 ~ 19	99.8	99.3	99.6	99.4	98.5	99.2	99.5	99.6
20 ~ 24	91.6	90.0	91.5	92.1	92.2	92.6	92.9	93.4
25 ~ 29	46.1	46.5	55.1	60.4	64.4	66.9	69.3	71.4
30 ~ 34	9.9	11.7	21.5	28.1	32.6	37.3	42.9	47.1
35 ~ 39	3.6	4.7	8.5	14.2	19.0	22.6	25.7	30.0
40 ~ 44	2.0	2.8	4.7	7.4	11.7	16.4	18.4	22.0
45 ~ 49	1.4	1.9	3.1	4.7	6.7	11.2	14.6	17.1
50 ~ 54	1.1	1.5	2.1	3.1	4.3	6.7	10.1	14.0
55 ~ 59	1.0	1.2	1.5	2.1	2.9	4.3	6.0	9.8
60 ~ 64	0.9	1.0	1.2	1.6	2.0	2.9	3.8	5.8
65 以上	0.9	0.9	0.8	0.9	1.1	1.4	1.7	2.4
女	26.9	24.9	20.9	21.7	23.4	24.0	23.7	23.2
15 ~ 19	98.6	97.8	99.0	98.9	98.2	98.9	99.1	99.1
20 ~ 24	68.3	71.6	77.7	81.4	85.0	86.4	87.9	88.7
25 ~ 29	21.7	18.1	24.0	30.6	40.2	48.0	54.0	59.0
30 ~ 34	9.4	7.2	9.1	10.4	13.9	19.7	26.6	32.0
35 ~ 39	5.4	5.8	5.5	6.6	7.5	10.0	13.8	18.4
40 ~ 44	3.1	5.3	4.4	4.9	5.8	6.7	8.6	12.1
45 ~ 49	2.1	4.0	4.4	4.3	4.6	5.6	6.3	8.2
50 ~ 54	1.6	2.7	4.4	4.4	4.1	4.5	5.3	6.1
55 ~ 59	1.3	2.0	3.5	4.4	4.2	4.1	4.3	5.2
60 ~ 64	1.1	1.6	2.4	3.5	4.2	4.1	3.8	4.2
65 以上	1.0	1.2	1.3	1.7	2.3	3.0	3.3	3.5

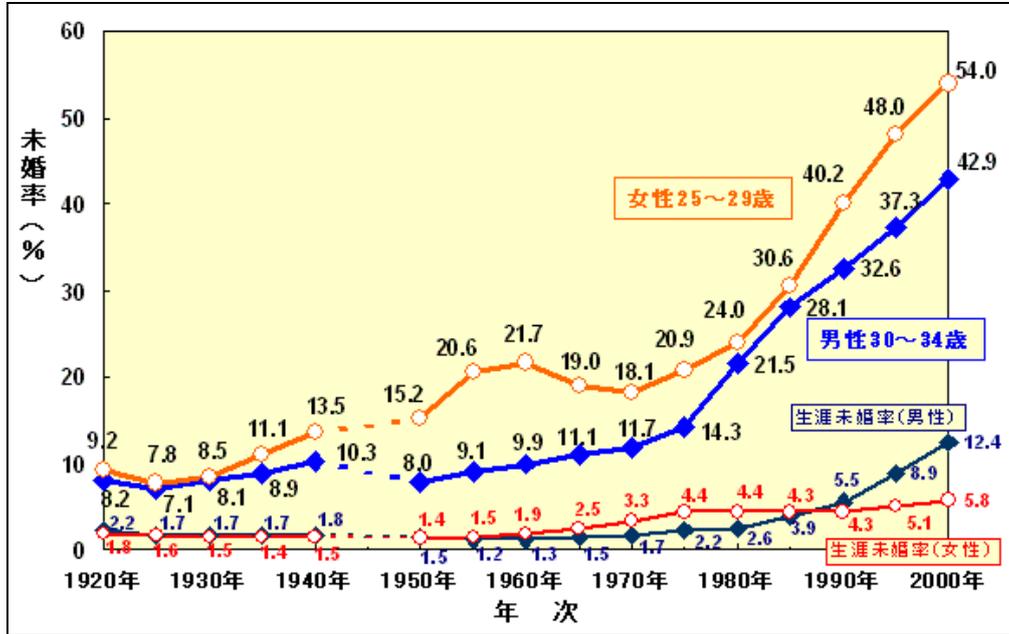
1980 年を境に未婚トレンドが大きく変わった

- ①日本の未婚率は、1920 年から 1980 年まで平均4-5%で横ばいだったのに、1980 年以降、この数値が男女ともに凄まじい上昇。
- ②1980 年を境に男女共に、男女の未婚率の割合が急上昇。2000 年における 35—39 歳の女性の未婚率は 13.8%、35—39 歳の男性の未婚率は 25.7%であったが、直近のデータ 2005 年ではそれぞれ 18.4%、30.0%となり 5%ポイントアップしている。
- ③この 2, 30 年間、日本では独身未婚者が増え続けているが、日本の出生率低下の原因は、女性

が子供を産まなくなった」事より「独身者が増えた」のが大きいことを示唆する。またこの数字が、30 過ぎて結婚してない未婚者を「負け犬」というような風潮を引き起こしている。

▼年齢別未婚率推移グラフ(1920～2000年)

各年「国勢調査」



●都市化が進む都道府県エリアでは未婚率は高い

未婚率が最も高い都道府県は、男女とも東京都でそれぞれ 37.9%、29.9%となっている。一方、最も低いのは、男女とも秋田県でそれぞれ 26.4%、17.2%となっている。

▼都道府県別未婚率ランキング(平成 17 年 2005 年「国勢調査」)

	高率ランク 10 (%)				低率ランク 10 (%)				
	男未婚率		女未婚率		男未婚率		女未婚率		
1	東京都	37.9	東京都	29.9	1	秋田県	26.4	秋田県	17.2
2	沖縄県	36.8	沖縄県	27.4	2	和歌山県	26.5	島根県	17.6
3	神奈川県	35.2	京都府	26.2	3	島根県	26.8	山形県	18.0
4	埼玉県	33.1	福岡県	25.6	4	宮崎県	26.8	富山県	18.1
5	京都府	33.1	大阪府	25.5	5	香川県	26.9	福井県	18.8
6	愛知県	32.6	神奈川県	24.9	6	山形県	27.1	山口県	19.3
7	千葉県	32.6	埼玉県	23.9	7	山口県	27.2	香川県	19.4
8	大阪府	32.3	宮城県	23.7	8	大分県	27.2	岩手県	19.4
9	福岡県	32.0	千葉県	23.5	9	愛媛県	27.3	鳥取県	19.4
10	宮城県	31.9	兵庫県	23.4	10	福井県	27.4	福島県	19.7
全国	平均	31.4	平均	23.2					

3. 独身者の結婚観

“わかっちゃいるけど”止められない「独身」ライフ

「独身調査」が始まったのは、1982年。その頃から未婚化がどんどん進んできた背景があり、「独身者の結婚に対する意識が変わってきたのでは？」という問題意識のもと、出生動向の一環として行ようになった。その中でも注目されるは「性交渉」の調査項目。1980年代末ころから『結婚をしてから性交渉』とはっきりしていた社会から、未婚のうちから性交渉が容認されるようになったため、独身者の「性交渉の有無」の項目(1987年から調査開始)が入り、90年代に独身者そのものが大きく変わっていたことを示唆する。ちなみに、第13回の調査(2006年)では、未婚者男女総数7585名のうち、「経験あり」が4269名、「経験なし」が2465名(不詳851名)という結果になっていた。第13回出生動向基本調査「結婚と出産に関する全国独身者調査(2006年9月、国立社会保障・人口問題研究所)」をもとに、独身者の結婚意識を前回調査(2002年)と比較しながら確認する。

1. 若者たちの結婚離れ

●結婚意志はあるが、先延ばししたい

- ①結婚意思を持つ未婚者は9割で推移、結婚を先のばしする意識は継続、
- ②当面の結婚に対しては、「まだ結婚するつもりはない」とする未婚者が継続して増えている。就業の状況別にみると男性では正規雇用者や自営業等で結婚意欲が高く、非正規就業者や無職で低い傾向が顕著である。
- ③結婚することには利点があると考え未婚者は、若い層を中心に「子どもや家族をもてる」ときに利点を感じない人が増えているが、正規雇用者では、結婚に利点を感じない割合が高く、非正規就業者や無職では低い傾向がある。

●独身中は、仕事に打ち込みたい

- ①独身にとどまる理由は、若い年齢層の女性を中心に「仕事(学業)にうちこみみたいから」が継続増加。
- ②また、「適当な相手にめぐり会わない」や、男性では「結婚資金が足りない」が増えている。

2. ゆらぐ男女のかかわり

●異性との交際は低調。同棲経験者は25歳以上で微増

- ①未婚男性の過半数、女性の4割強は異性の交際相手を持っていない。異性交際の状況は低調なまま推移している。
- ②同棲していると回答した未婚者は男女とも2%前後といまだ少数派だが、過去に同棲を経験した割合はわずかず増え、20歳代後半以降は男女ともほぼ1割に達している。
- ③未婚者の性経験率は増加傾向にあり、女性で顕著であったが、最近では男女ともに頭打ち傾向。経験者の避妊実行の割合は男女とも8割強で、ほとんどがコンドーム。

3. どんな結婚を求めているのか

●年齢差なんていってられない。

希望する結婚年齢の上昇傾向が頭打ち、女性ではより年齢の近い結婚相手を望む傾向も一段落。

●強まる専業主婦化退避傾向。理想は両立

未婚女性の理想・予定のライフコースは「仕事と育児の両立」。専業主婦を望む人は急速に減少。

4. **未婚者の生活と意識**

●親との同居が一番。親に甘える独身未婚者

- ①未婚男性の親との同居率は横這いだが、女性は、30～34歳の同居率が上昇。
- ②未婚男性の親との同居率は、無職・家事、自営業等、パート・アルバイトで高く(80%台)、正規雇用、学生で低い(60%台)。
- ③女性では、学生を別にすると就業の状況による同居率の差は小さいが、やはり無職・家事、パート・アルバイトで高い。

●わかっちゃいるけどやめられない独身

- ①結婚・家族を支持する意識に復調、周囲の結婚・子育てに肯定的な人は結婚意欲が高め。
- ②「生涯独身はよくない」「同棲するなら結婚すべき」「離婚はすべきでない」「子どもは持つべき」「結婚に犠牲は当然」などで支持が増えている。

4. **親と同居する未婚者の実態**

長男長女の時代。進めぬ親離れ子離れ！

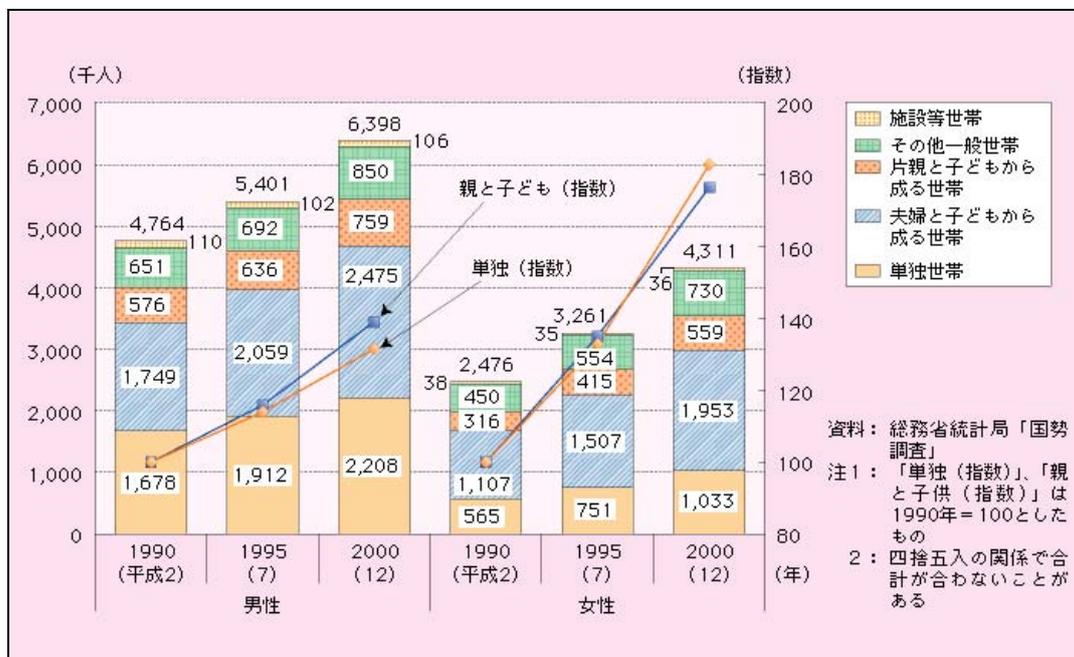
総務省「国勢調査」によれば、2000(平成12)年の25～39歳の未婚者数は、男性が約639万人、女性が約431万人存在する。このうち、親と子どもから成る世帯に所属する独身者数をみると、男性は約233万人(1990年)から約323万人(2000年)へ、女性は約142万人(1990年)から約251万人(2000年)へと増加しており、この10年間で、男性が約1.4倍、女性が約1.8倍の増加となっている。ただし、単独世帯に住む未婚者の増加と比較すると大きな違いはみられない。ここでは、国立社会保障・人口問題研究所「世帯内単身者に関する実態調査」(2000(平成12)年)をもとに「親と同居する未婚者」の実態をみる

- ①全体の6割は20歳代であり、2割が30歳代
- ②学歴をみると、高等学校卒が43%、短大・専門学校卒が33%、大学卒以上が20%と、高学歴層に偏っているわけではない。また、9割の者が仕事をもっており、そのうち7割以上がフルタイムで働いている。
- ③経済状況を見ると、収入の平均値は、男性は約300万円、女性は約220万円である。9割以上が社会保険に加入している。また、全体の7割の者が貯蓄をしている。

④全体の3分の2が世帯の家計に繰り入れをしており、30歳代では75%が繰り入れしている。

⑤繰入額は20歳代で20.7千円、30歳代で37.7千円、40歳代で64.5千円であり、全体の平均繰入額は、28.5千円である。

▼未婚者の家族構成の動き(25~39歳) 各年「国勢調査」



▼参考:独身のメリットとデメリット(筆者の感想)

○独身者のメリット		「一人で自由を楽しむことができる!」ということ	
・自由に使えるお金が多い!		小遣いはヨメさんの意思では無く、自分の意思で好きなように使うことができる	
・独り身はラク		個人差も激しいが、結婚して縛られること自体が嫌いな人もいる。特に親戚付き合いが上手くいっていない人は結婚してもアウト	
・面倒なことはしなくてすむ		結婚は、婚約届、結婚式、親戚つきあいが必要、離婚は、慰謝料、養育費に絡んだ裁判、離婚の手続きなどなど...面倒	
・仕事好きな女性はバリバリ働ける		女性は、結婚をキッカケとして退社せざるを得ない状況にあるが、家族の理解を得れば別な会社で仕事ができる	
・友人と自由に遊べる		遠慮なく好き勝手に夜遅くでも自由気ままに遊べる 家族サービスをしなくて住む	
・家や部屋を広く使える		一人暮らしだと部屋が広く感じる。自分だけの城で趣味など自由に使うことができる。そのようなスペースが確保できるだけでも充分	
●独身者のデメリット		「常に不安と寂しさ」がついてくる	
・周りの世間体が気になる		・深い寂寥感	
・全ての家事を自分でやらなくてはいけない		・病気になると猛烈に不安を感じる	
・老後に不安がある		・将来設計は全て自分次第	
・結婚をするかどうか悩み続ける		・子供が欲しくても独身のままではキビしい	

5. 独身者のトレンド

知っておきたい「独身」に関するトレンド用語

独身貴族

団塊世代が20代後半になり未婚者が増えた1977年ころ話題になった言葉。

独身貴族（どくしんきぞく）とは、独立の生計を立てている人の中で、独身で気ままに暮らしている人をさして言う。本来はなかなか結婚しない独身者を揶揄して言う言葉であった。

結婚すると第一に、家庭・世帯の体を維持するために経済的負担が扶養者に重くのしかかるだけでなく、扶養者配偶者とも家事・育児等に関しささまざまな心理的・手数的負担も増大する。独身だとそういう負担や心配が無く好き勝手にできる。つまりそのような負担・心配が無いので余裕がある独身の人を指す。

近年では将来不安もあり未婚者の増加が激しく死語となりつつある。独身貴族に代わって、「ヤングエグゼクティブ」、「ヒルズ族」、「セレブ」といわれるようになった。

一方、収入の少ない若い独身は「ニート」、結婚しない独身女性は「負け犬」などと呼ばれるなど独身者の格差が大きな話題になっている。

高等遊民（こうとうゆうみん）

ニートの定義とも重複するが、現代の日本ではニートが社会から疎外されてしまい、労働意欲だけでなく生活意欲も喪失してしまった存在と見られがちなのに対し、高等遊民にはそのようなニュアンスはない。

明治時代から昭和初期の近代戦前期にかけて、帝国大学等の高等教育機関で教育を受け卒業しながらも、経済的に不自由が無いため官吏や会社員などになって労働に従事せず、読書などをして過ごしている人のこと。夏目漱石の造語であり、作中にしばしば用いられた。

これらの人々は、なんら生産的な活動をせず、ただ日々を雅やかに過ごしたり、学問の延長として己の興味のある分野（趣味の活動を含む）を追い求めていた。いわば近代日本の上流社会の子弟のみに許されていたのである。

「アラサー」と「アラフォー」

40歳前後の女性を指してアラフォー（around 40の略）と表現するメディアが増えている。かつての女性は「仕事と結婚」の間で、二者択一を迫られていた。ところがアラフォー世代は、男女雇用機会均等法のもとで社会進出を果たしたことから、仕事と結婚を比較的自由に選択できるようになった。だがそのことが人生の転機を遅くさせ、将来に対する漠然とした不安を抱かせている。ちなみに四捨五入で現在40歳となる女性は1964年から1973年に生まれた人となる。アラフォー世代にとって、結婚や出産に関する悩みは多い。例えば「未婚者などは出産までのタイムリミットが迫っている」という問題がある。つまり結婚や出産を決断するために残された時間が、少ないのだ。そしていざ出産に踏み切った場合も、周りに同世代の母親がいないことで悩むことになる。いっぽう結婚しないことを選択している人は、老後の生活に漠然とした不安を抱いている。「アラサー」は「around 30」の略。

負け犬・おひとりさま

2004年には「負け犬」が流行語となった。「30代・非婚・子なし」という定義だが、積極的に職業をまっとうする女性を、逆説的に応援する言葉だった。これはアラフォー世代に属する非婚者の姿そのものだといえる。世代が抱える問題は、現在まで持ち越されたまま。アラフォーとは、女性の新しい生き方を示す「最先端の世代」である一方、新しい生き方にもがく「苦悩の世代」でもある。

アラフォー世代は独自の文化も生み出した。例えば故・岩下久美子氏が1999年に提唱した「おひとりさま」もその一つ。これは「個を確立した大人の女性」を指す言葉だった。同氏は「おひとりさま」の行動として、レストランを1人で気軽に利用する、1人旅を楽しむなどのスタイルを提案した。依存心をなくすことで個を確立して、逆に他者との良い共存関係を目指す意図があった。のちにアラフォー世代では、ご褒美消費などの「おひとりさま」的な新習慣も定着した。

婚活の時代

「婚活」という言葉は、「結婚活動」を略したもの。「国民用語」として定着した観のある「パラサイト」（いわゆる慢性化した「親のすねかじり」）同様、家族社会学者で中央大学教授の山田昌弘氏の造語。

1975年以降、日本人の未婚化傾向を見ていくと「非婚化」と「晩婚化」が進む状況にある。「非婚」とは、結婚をしたくてもできなかった状態。

その晩婚や非婚を避けるため、[就職活動]＝「就活」と同じように、合コンから見合い、自分磨きなど、積極的に行動・活動をすることが重要で、様々な活動をしないと結婚できない！までヒートしている。就職活動（就活）は、情報を集め、セミナーに通い、試験勉強をし、エントリーシートを作り、面接に行くなど、多様なオープンスタイルがあるが、婚活にはどちらかというと、秘密性やクローズド性が求められる。かつての花嫁修業「華道、茶道、料理教室」が懐かしく思われるがどんな違いがあるのか未だになぞである。

パラサイト・シングル

「学卒後もなお親と同居し、基礎的生活条件を親に依存している未婚者を言う」と定義されている。パラサイトは寄生虫、シングルは独身の意味である。若者パッシングをするときに使用する言葉の一種としても知られている。

しかし、マイホームブームで親子の同居が充分可能な住居へ移行し、また、都市での大家族化（二世帯・三世帯居住）や同じ都市内での親族の分散集住が進むなか、わざわざ大金をはたいて子の世代が独り暮らしをする必要もなくなった。また、独り暮らしによって住宅に可処分所得の一部を注ぎ込むより、親と同居して、その住居から通勤できる企業に就職する事により、住居費の二重払いを無くして自己の収入を有効利用できるのが合理性がある。一方、日本の核家族世帯も長男長女時代に入り「子の親離れ、親の子離れ」の遅れなどもあり、親（精神的）と子供（経済的）の相互貢献パラサイト意識も出てきている。未婚化や晩婚化が当たり前になってきた今日ではマイナスよりプラスイメージでとらえられるようになった。

「ガラスの天井」という問題

アラサーやアラフォー世代のキャリア女性は「ガラスの天井」という問題を抱えている。管理職に就いている女性が、それ以上の要職に就けないという状況を指す。制度上はそのことを全く明記しないのに、運用で差別されるため「ガラスの天井」と表現する。厚労省の賃金構造基本統計調査によれば、民間企業で部長職に就く女性の割合は2005年時点で2.8%に過ぎない。この限界を見越し、職を辞して結婚や出産に踏み切る女性もいる。

▼参考:「独身者」名言集・格言集

○そもそも男の独身というものは、女の身持ちを誤らせるもとです。	ワイルド「嘘から出たまこと」
○とげやアザミはひどく刺す。しかしオールド・ミスはもつと鋭く刺す。	ガイベル「詩」
○喧嘩せずに暮らしていけるのは独身の男だ。	ジェローム「エラスムスのアダジア」
○精神の闘いにおいては、独身者のほうが世帯者よりもずっと危険をおかす。	キルケゴール「人生行路の諸段階」
○大衆に役立つ最上の仕事や功績は、独身者か、あるいは子供のいない男によってなされる。	フランシス・ベーコン「随筆集」
○馬鹿な者は独身の間は結婚した時のよろこびを空想し、結婚すると独身時のよろこびを空想する。	武者小路実篤「人生論」
○立派な財産のある独身の男は、細君を必要とするに相違ないというのが一般に認められている真理である。	オースティン「自負と偏見」
○自由な男、つまり妻を持たない男は、少し才知があれば自己の身分以上の社交界に出入りして、上流階級の人々と同等に交際することができる。一方、しばられている男の場合には、こんなに簡単にはいかない。結婚は、あらゆる人々を自分の中に閉じ込めるから。	ラ・ブリュイエール 「人さまざま」
○独身者というものは不完全な動物である。片刃のこわれたはさみのようなものである。	フランクリン「貧しいリチャードのアルマナック」
○美しく立派な女性が未婚でいるのは、すべての男性に対する静かな、かつ声高な告発である。	ゴルツ「断片」

6. 未婚者最近の話題 6選

独身者にターゲットを絞った商品やサービスが注目を集めている。

「おひとりさま」や「負け犬」などの言葉が流行して以来、独身者には、ひとりの時間を楽しみ、人生を謳歌(おうか)しているというイメージが先行していたが、注目商品やサービスから浮かび上がるキーワードは「他者とのきずな」。心のすき間を埋めてほしいという思いが投影しているようだ。

独身貴族という言葉があるように、お金のある「独身」にターゲットを絞るが、独身者が多くなれば独身者も多様化個性化する。独身者の話題に事欠かない時代になった。

以下、最近の話題を紹介する。

①独身指輪は赤い糸？

スウェーデンで生まれた指輪「シングルリングン（直訳すると「独身指輪」）。女性用（2サイズ）と男性用（2サイズ）で対となるシリアルナンバーがつけられ、世界のどこかに同じ番号の指輪を持つ異性がいるという。アラサー、アラフォーの予備軍である20～30歳を中心に流行っているようで、出会いがなくなったのを寂しく感じているため新しい異性とのロマンチックな出会いに期待を掛けているとか。男性に出会ったらまずチェックしてしまうのが、指輪。左手の薬指に光る指輪があれば、恋の対象外。20代、30代の女性のほとんどが男の指輪に目が行ってしまうとか。

②「負け犬」から「化け犬」へ、ネットで“群れ”を作る

数年前、『負け犬の遠吠え』（著者酒井順子）が、独身女性の心情を吐露し話題になったが、その後、独身女性限定でブログ開設サービスを無料で提供している「化け犬・jp」は会員約1万人になり、その約半数が30代の女性だという。結婚しなかった負け犬（独身女性）を「化け犬」と呼んでいるようだ。時間や経済面での自由を犠牲にたくないから結婚しないことを選択した独身者の多くは、やはり、情の部分では満たされず、一種の“群れ”を作ること自分たちの存在を正当化したいと考えている面があるようだ。

③未婚者の死亡率は既婚者より58%高い -

英国の医学学会の専門誌に発表されたが、カリフォルニア大学ロサンゼルス校(University of California at Los Angeles)の研究者が、1989年から1997年の国勢調査と成人6万7000人の死亡統計を調査したもの。

高齢と健康状態の要因を除くと、配偶者と死別した独身者は結婚を継続している男女に比べ40%近く高い確率で死亡している。また、離婚後の独身者あるいは別居中の男女の死亡は、27%高い確率となった。未婚者については、58%高い確率を記録した。とりわけ独身男子にこの傾向は強く、19歳から44歳までの未婚男子は、同じ年齢グループの既婚者の2倍近い確率で死亡している。未婚者は社会的孤立に陥る可能性が高く、子や親戚からの援助が少ないことが死亡率を高めている原因ではないかと見られている。また、若い未婚者は、エイズウイルスに

感染する可能性が高いことも死亡率を押し上げたとしている。ただ、未婚者は健康管理に注意を払っており、既婚者より飲酒量が少なく、運動量も多い。肥満度も低い結果になっている。

④未婚女性の5人に1人が冷蔵庫に野菜なし

見ればその人自身が丸ごとわかるとも言える冷蔵庫について、アイシェアとワイズスタッフが共同で調査を実施。一人暮らしの未婚女性のうち、5人に1人が冷蔵庫に野菜なしであることがわかった。自宅の冷蔵庫に入っている食材をチェックしてもらったところ、全体では9割が「野菜」を保有していたが、一人暮らしの未婚女性の野菜保有率は平均を下回る79.3%で5人に1人は冷蔵庫に野菜がないことが判明。また一人暮らしの男性の場合、未婚者の「野菜」の保有率が53.7%であるのに対し、単身赴任など既婚者の場合は保有率が76.9%と未婚女性にせまる高い数字を示し、同じ男性でも大きな違いが見られた。野菜のほかに一人暮らしの未婚の男女で差が見られたのは「卵・乳製品」の保有率（男性：59.8%、女性：83.6%）や「冷凍食品」の保有率（男性：47.6%、女性：62.1%）。一方「菓子・ケーキ」の保有率（男性：23.2%、女性：29.3%）や「調理済みの惣菜」の保有率（男性：24.4%、女性：22.1%）には大きな男女差が見られなかった。

⑤全国人民代表大会の代表が「姐弟恋」(姉さんニョウボ)を奨励

中国で、全人代の代表の一人が、「高齢のホワイトカラー未婚女性」が増えていくことを憂慮して、「姐弟恋」を奨励したとして中国のマスコミは沸き立ったようだ。「姐弟恋」とは「姐(姉)と弟との恋」。すなわち姉さん女房のこと。発言者は、女性たちが高齢かして売れ残っていく現象を嘆いて、「姉さん女房だっていいじゃないか」と呼びかけ、中国社会に根強い「男大女小」（夫の年齢が妻より高い）という伝統的観念を打ち破ろうとしたのだそうだ。結果は未だにわからない。

⑥結婚イメージ—未婚者は「幸」、既婚者は「忍」

通信教育のユーキャン「結婚観やライフスタイルについて意識調査」（06年インターネット調査、25～34歳の独身会社員を対象、有効回答数は400で、性別の内訳は男女同率）

結婚についてのイメージを漢字一字で尋ねたところ、「幸」という字が最も多く挙がり、10.3%がそう回答した。これに「共」（7.0%）、「愛」（5.3%）などが続く。ユーキャンが以前、子供のいる専業主婦を対象に実施した同様の意識調査では、「忍」という字が最も多く挙がっており、既婚者と未婚者では結婚のイメージに違いがあるという。

また、独身会社員に、現在1カ月間に自由に使える金額を聞くと、男性は平均7万3060円、女性は6万6500円だった。独身男性のリッチぶりが伺える。

7. 独身者への警鐘

①20代男性の3人に1人は生涯未婚の恐れ

2005年国勢調査では、65歳以上人口の比率21.0%は世界最高、15歳未満人口の割合13.6%は世界で最も低い水準になり、少子高齢化が歴然とした。一方、「生涯未婚率」(人口学上の概念で50歳時点での未婚率である。女性なら結婚しても子どもが出来る可能性が極めて低くなるのでそう定めた)の上昇が加速しており、男性なら今の30代後半は4人に1人、20代後半は何と3人に1人が生涯独身を通す可能性が高い。女性は男性より生涯未婚率は大幅に低いが、今の20代、30代は同世代男性に急接近しそうである。

男性でも50歳以上での結婚は少ない。

若い世代の将来の結婚行動を見通す手段として、年上世代がそれぞれ直近の5年間にした「脱未婚ポイント」を積み重ねると仮定すると、20代後半男性は現在72.6%の未婚率であり、30代前半世代の脱未婚21.6ポイント、30代後半世代の脱未婚12.0ポイント、40代前半世代の脱未婚3.8ポイント、40代後半世代の脱未婚1.1ポイント、50代前半世代の脱未婚0.6ポイントを合計した39.1ポイントしか未婚が減らないなら、差し引き33.5%が生涯未婚で残る。20代男性の3人に1人は生涯未婚の恐れがある。

②消費税アップと独身税の二重の苦痛が待っている

政財界問わず、将来世代の活力を生み出す一方で、大きな負担をしている人と、そうでない人の公平性を税制面で図るべきだという意見がある。例えば、世帯人員が多ければ所得税が安くなる制度の導入や、「働ける扶養者の扶養控除の縮小・廃止」「扶養控除から税額控除制度への切り替え」などをさまざまところで検討している。その中で、少子化すなわち独身者未婚者という直線的ロジックで、独身者に税負担をという案も登場してきた。

独身税は未婚者の負担を強いることになるから、税金を払わずにすむよう早期の結婚が促進され、少子化が緩和されると考えた、いわば、“アメとムチ”のムチに相当する政策である。

「独身税」の中身は、二十歳過ぎの独身者に独身税を課し、その額は、現行の国民年金保険料と同額の1ヵ月13,800円にする、というもの。この税金を財源に全国各地に男女が出会える施設を創設する、という内容になっているそうだ。

独身税は、ブルガリアにおいて子作りの促進を目的として、1968年から89年にかけて実際に「独身税」を徴収していたが少子対策とは関係なかったとか。消費税を上げるためのダミーなのかどうかよくわからないが、結婚すれば消費税が、独身であれば消費税と独身税ということになる。

税金によって結婚は決まるのか。

③ひとりでも生きられる社会へ向かうのか

50代の概ね4人に1人が未婚となり、離別の増加や死別も考慮すれば、50代以上の方が属する世帯のうち4割以上が「単身かつ子どものいない世帯」となる(社会保障審議会・人口構造の変化に関する特別部会)。人口構造の変化が続けば、2055年にはこのような状況も想定しうると指摘している。

日本の人口構造の変化は、少子高齢化のみならず、未婚・単身世帯化を伴っており、社会に大きな影響を与えていく。こうした変化は、既に始まっている。全人口に占める一人暮らしをする人(単身世帯に属する人)の割合は、7.6%(90年)から11.3%(05年)に増加した(総務省『国勢調査』)。単身世帯の増加は、社会にどのような影響をもたらすのであろうか。この点、単身世帯の研究が進む英国では、単身世帯化の影響として、(1)所得格差の拡大、貧困層の増大、(2)医療や福祉サービスへの需要の拡大、(3)持ち家志向の低下、(4)都市中心部への居住者の増加、などが指摘されている。こうした影響をみると、未婚・単身世帯化には、まずは公的なセーフティネットの整備が求められるといえよう。例えば、生活保護制度の拡充や、単身世帯を前提にした医療・介護の在り方も一層検討する必要があるだろう。また、公的年金制度は、片働き世帯をモデルに制度構築されてきたが、単身世帯の増加も視野に入れる必要があるだろう。独身世帯は社会の厄介者になるとは…。

執筆者コメント

『国家を信用せず、家族を作ろうとしない時代がやってくる』

現在、バブル経済の頃リッチな生活を謳歌していた未婚女性は、今や適当な相手の出現を待っても得られる確率が低いので30歳を越してしまい、また未婚男性も妻子を養うに足る年収を得られないので結婚が遅れている。収入期待が上昇すると出生率が低下するという点は、早くから経済学者のマーシャル(1842-1924)が「経済学原理」の中で指摘しているところだが、未婚女性の期待収入が無闇に高いのではなく、家庭生活や子育てに稼げる以上のお金がかかるようになってしまう時代になってしまったのだ。

国家権力・既存秩序を否定しようとした1970年代に、団塊世代の多くの若者(独身者)たちが、『国家を信用せず、家族を作ろうとしない時代がやってくる』と予感したのであるが、あれから30年以上経過した今日の日本はそんな時代に入った。

確かに現在の日本の国家や政治(行政)の信頼は大きく揺らぎ、心理的・経済的な構造要因によって少子高齢化社会に大きな関係をもつ「未婚化・少子化」⇒「晩婚化・少子化」⇒「非婚化」の傾向は止まりそうにない状況である。

“男は仕事・女は家庭”というような考え方は男女共同参画社会の推進と雇用環境の変化によって性差別的な旧弊として消え去ろうとしているが、産業構造と消費文化の急速な変化によって男性(父親)がプライドを持った重労働で家族を支えるという“強い男性の時代”も終わった。

一生懸命努力をした作り上げた団塊世代のマイホームに新しい独身者たちが戸惑いつつも生活をしている。未婚化から晩婚化まではありうるが、非婚化まで行くと団塊世代は予想だにできなかったはず。

団塊世代は、せっかくつくり上げたマイホーム核家族が幻想であったことは死ぬまで認めないようにして欲しい。